様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３１ 年　 ４ 月　 ９ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６８４３

研究課題名（和文）琉球諸方言における焦点標示に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A typological survey on focus-marking in Ryukyuan languages

研究代表者
下地　理則（Shimoji, Michinori）

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：８０５７０６２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、琉球諸語における焦点助詞（du, ga)による焦点標示の方言差(バリエーション)を記述するとともに，そのバリエーションに関して，可能なパターンを記述でき，不可能なパターンを予 測できるモデルを提示することに成功した。焦点助詞の使用が、焦点タイプ(WH焦点vs. WH応答焦点 vs. 対比焦点)と焦点ドメイン(項焦点 vs. 述語焦点)の2つの変数で記述できることを示した。さらに、琉球諸語の焦点標示に関して，通方言的に以下の2つの階層 を提案した。
(1) 焦点タイプの階層:対比 > WH応答 > WH　　(2) 焦点ドメインの階層:項 > 述語

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでの琉球語学では、焦点助詞の使用に関する方言差が注目されておらず、焦点があるところには焦点助詞が使われるものと漠然と想定されてきた。しかし、経験的に、「北琉球語では焦点助詞がなかなか聞かれないが、南琉球ではよく聞かれる」という印象はどのフィールドワーカーも持っていたのも事実である。本研究は、この印象論的な方言差を初めて明確にし、かつ予測可能な形で一般化した点に大きな学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The present study is a cross-dialectal survey of the relationship between various kinds of foci and their formal encodings in Ryukyuan languages. On the one hand, the present study is descriptive, dealing with a hitherto untouched issue of dialectal variation among Ryukyuan languages with regard to the usage of morphological focus-marking such as du and ga. By examining fifteen Ryukyuan languages, it has been shown that there is a considerable dialectal variation with regard to focus-marking and that the relevant factors are focus function and focus domain (argument vs. predicate, etc.). On the other hand, the present study is typological, giving a consistent model that explains the observed variation and makes predictions about the possible language patterns and impossible ones in the form of a pair of hierarchies, Focus Type Hierarchy (Contrastive Focus > WHA Focus (the focus of the answer to a WHQ) > WHQ Focus) and Focus Domain Hierarchy (Argument > Predicate).

研究分野：琉球諸語の記述、言語類型論

キーワード：言語学　日本語学　方言学　情報構造　言語類型論　琉球諸語

１．研究開始当初の背景

琉球諸方言は、本土方言のほとんどがすでに失った係り結びが現在でも活発に用いられるとされ、国内外の方言研究者、日本語研究者、歴史言語学者の関心を集めてきた。係り結びを、焦点助詞（係助詞）による文中要素への**焦点標示**と、それに応じた述語の活用形式の制限（**呼応関係**）の 2 つの要素に分けるとすれば、これまでの琉球諸方言研究において圧倒的な注目を集めてきたのは呼応関係のほうであった(例えば内間 1985)。なお、焦点助詞が述語形式を決めるという従来の呼応関係の考え方に疑義を呈し、逆に文のモダリティが焦点助詞の出没を決定するとする研究（かりまた 2014、 Shimoji 2011）もあるが、これらもまた述語形式と焦点助詞の関連を扱う呼応関係の研究史に位置づけられる。呼応関係の研究史において注目されてきた事実は、北琉球の多く（特に奄美）では述語形式に連体・終止・係り結び形の 3 種の区別があり、呼応関係がはっきりしている一方、南琉球（特に宮古）では上記 3 述語形式がすべて同形であり、呼応関係が消失しているという方言間バリエーションである。

しかし、この呼応関係に関する研究史には重要な見落としがある。すなわち、南琉球では焦点助詞が 1 つの文にほぼ義務的に生じるほどよく使われる一方、北琉球では焦点助詞の使用頻度が低いという、焦点標示の出現そのものの南北方言差である。この事実は係り結びの方言差を語るうえで極めて重要な事実であるが、呼応関係中心の研究動向においてはなかなか議論の中心を占めるまでには至っていない。

そこで研究代表者は、上記の焦点助詞の使用に関する南北差をより明確に記述するため、南北 4 方言（北琉球奄美浦方言・湯湾方言、南琉球宮古伊良部方言・与那国方言）を対象に予備調査を行った（その結果は下地 2015 として発表）。まず、これまでの研究にない手法として、情報構造の観点から、焦点タイプを区別し、焦点タイプと焦点助詞の出現の関連を探った。これまでの琉球諸方言の研究において焦点標示の例を考察する際、必ず用いられる例は疑問詞疑問文とそれに対する応答（「誰が来たの？」「太郎が来た」のような例）であるが、焦点タイプに関する情報構造理論(Lambrecht 1994)や言語類型論的研究(Givón 1990 など)が示すように、焦点タイプは上記の 2 つ（下地 2015 ではそれぞれ **WH 焦点、 WH 応答焦点**）以外に、「次郎ではなく太郎が来た」のような**対比焦点**や、文全体が焦点領域にあるような**文焦点**（例：「どうしたの？」→「太郎が来た」）もある。

これらの焦点タイプのうち、対比焦点・WH 焦点・WH 応答焦点に注目して焦点助詞の出現を調べた結果、明確な南北差が現れた（**図 1**）。

例えば南琉球宮古方言では焦点タイプに関係なく焦点助詞の使用(図 1 では F で標示)が可能だが、北琉球の奄美大島浦方言では対比焦点の場合に限定して使われる。

	対比焦点	WH 応答焦点	WH 焦点
宮古伊良部	F/F	F/F	F/F
与那国	F/F	F/F	
奄美（湯湾）	F/F	F/	
奄美（浦）	F/		

図 1. 焦点タイプと焦点助詞の使用可能性

（F：焦点助詞使用可；動詞述語／非動詞述語）

２．研究の目的

予備調査で明らかにした事実を、より多様な方言に関して確かめるために，調査地点を大幅に拡大し、南北まんべんなく考察対象にしたうえで、現地調査を中心に据えて、以下の 2 点に絞って研究を行う。

(a) 焦点タイプ・述語タイプと焦点標示の関連を考察する。

(b) 主語への焦点標示に注目し、焦点標示と格標示の関連を考察する。

３．研究の方法

扱う方言は**図２**の通りである。

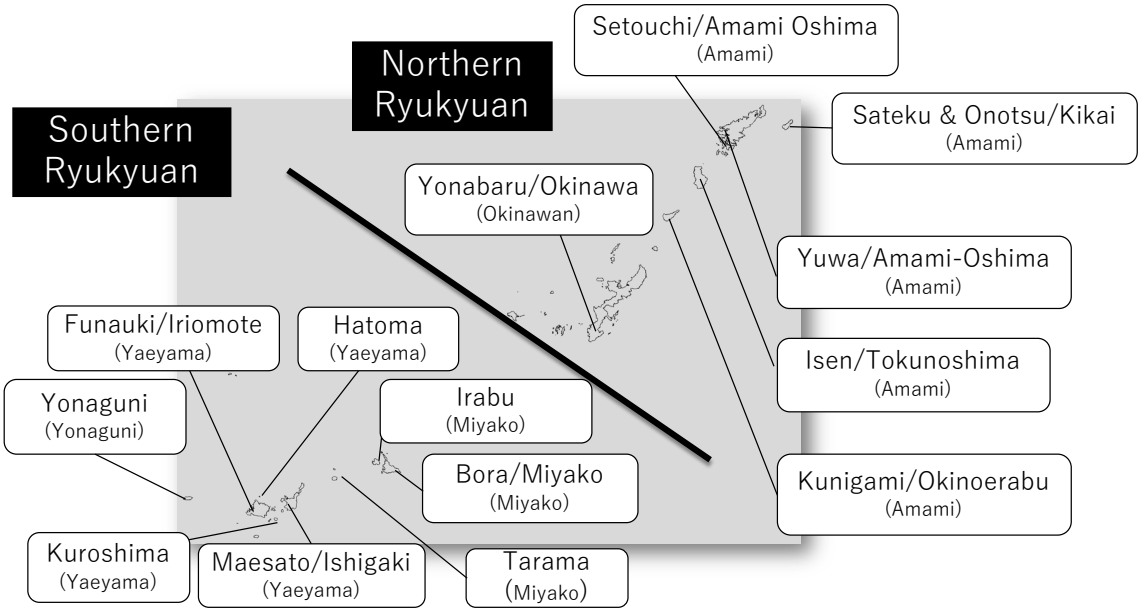

図 2. 本研究で扱った方言

予備調査の結果から，調査票は①焦点タイプ（対比焦点・WH 焦点・WH 応答焦点），②焦点ドメイン（主語・目的語・述語），③述語タイプ（動詞述語・形容詞述語・名詞述語），④他動性（自動詞・他動詞），⑤主語の有生性（本来ガをとる名詞句と本来ヌをとる名詞句），を変数として作成する。例えば「アキラではなく犬が走っている」「犬ではなくアキラが走っている」のような翻訳用例文ペアは，①対比焦点，②主語焦点化，③動詞述語，④自動詞までは同じだが，⑤の有生性のみ異なる。このように，調査例文は和文で作成し，これを翻訳してもらう形式をとる。予備調査によって，翻訳だけでは取りにくい例文については，画像や絵を使用することを考えているが，予備調査の結果，本研究で扱う焦点標示に関する例文調査は文脈依存度が低く，調査者にとってコントロールしやすく，話者にとっても翻訳しやすい。

４．研究成果

3 節で示した調査の結果，特に①焦点タイプと②焦点ドメインに着目することで，多様な方言差の明確な一般化が可能であることが判明した。結果は表 1 の通りである。

表 1．焦点標示の方言差

Language	Pattern	Exhaustive						Non-exhaustive		
		Contrastive			Non-Contrastive					
		Contrastive Focus			WHA Focus			WHQ Focus		
Onotsu (Kikai, NR)	CF-sensitive	F	F	F						
Yonabaru (Okinawan, NR)		F	F	F						
Isen (Tokunoshima, NR)		(F)	F	F						
Sateku (Kikai, NR)	EF-sensitive	F	F	F	F!					
Setouchi (Amami, NR)		F	F	F	F!	F	F			
Yuwan (Amami, NR)		F	F	(F)	F!	F	(F)			
Kunigami (Okinoerabu, NR)		F	F	F	F	F	F			
Yonaguni (Yaeyama, SR)		F	F	F	F	F	F			
Irabu (Miyako, SR)	Non-restrictive	F	F	F	F	F	F	F	F	(F)
Bora (Miyako, SR)		F	F	F	F	F	F	F	F	(F)
Tarama (Miyako, SR)		F	F	F	F	F	F	F	F	(F)
Kuroshima (Yaeyama, SR)		F	F	F	F	F	F	F	F	(F)
Hatoma (Yaeyama, SR)		F	F	F	F	F	F	F	F	F
Funauki (Yaeyama, SR)		F	F	F	F	F	F	F	F	F
Maesato (Yaeyama, SR)		F	F	F	F	F	F	F	F	F
Constituent focused		Arg		Prd	Arg		Prd	Arg		Prd
		Subj	Obj		Subj	Obj		Subj	Obj	

表から，琉球諸語の焦点標示に関して，３つのパターンに分類することができることがわかる。すなわち，CF-sensitive, EF-sensitive, Non-restrictive の３パターンである。これが，焦点標示に関する最も重要な方言差（バリエーション）である。しかも，これらのパターンは含意不変として以下のように一般化できることがわかる。

(1) 焦点タイプの階層：対比 > WH 応答 > WH
(2) 焦点ドメインの階層：項 > 述語

琉球諸語の焦点標示に関して，この焦点階層(Focus-Marking Hierarchies)をもちいることで，「階層のある地点で焦点標示が可能なら,その左側でも焦点標示可能である」と一般化できる。この階層を用いることで，まだ記述されていない任意の方言についても，その焦点標示のバリエーションを予測でき，実際のデータから検証することができる。

上記の成果は、日本言語学会の学会誌『言語研究』の最新号(154 号)における論文 Information structure, focus, and Focus-Marking Hierarchies in Ryukyuan Languages として発表された。

なお，上記の研究では、焦点標示が特に主語の格標示と大きく関連していることを指摘したが、そこから新たな研究テーマとして、日本語共通語のような、焦点助詞を持たない方言における主語の格標示の様相を描く研究に発展し、竹内史郎・下地理則の共著『日本語諸方言における格標示と分裂自動詞性』（東京：くろしお出版）として出版した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

Shimoji, Michinori. 2018. Information structure, focus, and Focus-Marking Hierarchies. 『言語研究』154: 1-37.

〔学会発表〕（計 2 件）

Shimoji, Michinori. 2018. Ryukyuan languages from a typological perspective. Paper read at Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization, NINJAL.

下地理則. 2018. 「日琉諸語における複数表示のパターンと類型化」第 107 回日本方言研究会発表予稿集.

〔図書〕（計 2 件）

竹内史郎・下地理則. 2019.『日本語諸方言の格標示と分裂自動詞性』東京：くろしお出版.

下地理則. 2018. 『南琉球宮古語伊良部島方言』東京：くろしお出版.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。